亡霊の言葉

火野葦平

奇推理小説

亡霊の言葉

火野葦平

五月書房

火野葦平

定価二八〇円

昭和三三年七月三〇日　初版

著　者　火野　葦平

発行者　竹森　久次

発行所　五月書房

東京都新宿区新小川町二―八

電話（33）四三二一

振替東京三三九四三

新協印刷・橋本製本

亡霊の言葉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

はじめに

私は探偵小説が好きである。三十年ほども前、早稲田の学生であったころ、エドガア・アラン・ポオを耽読し、卒業論文にはポオを書くことにしていた。「シェアラザードの一千二夜目の物語」他、数篇を訳したこともある。しかしポオの作品のうちでも、「モルグ街の殺人事件」や「盗まれた手紙」などのような、いわば探偵小説としてのオーソドックスな作品よりも、私は、「赤き死の仮面」「アッシャー家の没落」「黒猫」などのような、神秘的な雰囲気のある、怪奇小説の方に魅力を感じていた。その後、佐藤春夫氏に傾倒するようになると、「指紋」に熱をあげてしまい、何十度読んだかわからない。「指紋」の中には、ポオの作品中のウイリアム・ウイルスンが出て来るので、佐藤先生もポオの愛読者なのであろうと思った。ホフマンも同様の意味で熱読した。自分も書いてみようと思い、学生時代友人たちと興した同人雑誌「街」の創刊号に「狂人」という探偵小説を発表した。連日、トリックを考えたり、暗号作りに没頭したりしたこともある。日本の作家の作品も、江戸川乱歩氏をはじめ、愛読した。

この本に集められている作品は、終戦後、書いたものばかりである。いずれも百枚前後の中篇だ

が、普通の意味の探偵小説や推理小説とはいくらかちがって、やはり怪奇的な雰囲気がつきまとっている。また、「亡霊の言葉」は戦争と人間とがテーマになり、「深夜の虹」は、こういう形で、芸術と人間とのテーマを追求してみようと考えたのである。「日本アラビアン・ナイト」はシエアラザード姫が一千一夜の話をする形式を日本に持って来て、恋愛と人間とのテーマを展開してみたのだ。むろん、むずかしい小説を書こうとしたわけではなく、なによりも、面白い作品にしたいと思ったのであるが、やはり、私流の探偵小説になった。どれにも殺人事件があるが、名探偵が登場して、快刀乱麻を断つように、解決するという風にはなっていない。探偵小説だからといって、なにも、探偵が出て来なければならないということはないと私は考えていて、探偵の出て来ない、しかし、謎ときの面白さと、スリルとがあり、神秘と、怪奇と、そして、生きている人間が出て来る探偵小説を書きたいと考えていた。この三つの作品は、その実験である。私の他の多くの作品と同様、舞台はいずれも北九州になっている。書きたいテーマは持っているので、久しぶりに、近く、すこし長い探偵小説を書いてみたいと考えている。また、長篇推理小説を書いてみたい気持もある。いずれにしろ、この一巻は、私の好きな作品ばかりだ。

昭和三十三年七月十日

火野葦平

目次

はじめに　三
亡霊の言葉　七
深夜の虹　六五
日本アラビアン・ナイト　一四七

装幀　滝平二郎

亡霊の言葉

絞首刑

友人佐古雄太郎の自殺は、私をおどろかしたのみならず、彼を知るすべての人々から、不思議とされた。佐古は、フィリピンから引きあげてきて以後、その事業は軌道に乗り、なかんずく土木建築業佐古組、鉄鋼取扱佐古商事株式会社の二つは、文字どおり旭日昇天のいきおいで、基礎をひろげ、彼の事業界における地位は確固たるものとなっていた。したがって、金も相当でき、市会議員にうって出ると、四位で当選、おまけに、美しい恋人もできて、結婚式の日取りまできまっていた。その彼が、なんのための自殺、しかも、ぶざまな縊死をとげたのか、誰も理解することができなかった。ひとり残された老母ヨネさんは、そういえば、最近強度の神経衰弱にかかっていて、夜眠れないらしく睡眠剤アドルムを多量に服用していたということを涙ながらに語ったが、それとて、得意の絶頂にあった佐古が、そして柔剣道、どちらも四段という巨漢が、いかなる理由で、神経衰弱などになったかという謎の方を深めるばかりであった。

葬儀は、盛大に営まれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

遺書があったので、覚悟の自殺たるはあきらかである。一時は、警察方面も、なんらかの秘密をたぐり出そうという気配を見せたが、地方名士の遠慮もあってか、それもお座なりの程度で、名探偵の活躍などという運びにはならなかった。

遺書は三通、どれもこれも簡単で、

「お母さん、不孝を許して下さい。若い頃から心配のかけとおし、今度はやっと御恩がえしができると考えていましたのに、またも、大不孝をしなくてはならなくなりました。お母さんに先だって、お父さんのいるあの世へ参ります。だけど、僕はきっとお父さんには会えますまい。何故なら、お父さんのいるのは極楽、僕の行くのは地獄ですから。僕はもう疲れたので、死にます。どうぞ、いつまでも永生きして幸福に暮して下さい」

「桂千絵さん、あなたのようなすばらしい恋人を得、やがては花嫁とすることができるようになっているのに、私はいま死の道をえらびます。私は疲れました。お許し下さい。どうぞ、私のことなど忘れて、立派な人のところへ嫁いで下さい」

「火野君、さようなら。俺は疲れた。もう、すこしは楽になりたい。君と暮したフィリピンの戦場が思いだされる。ところが、それは過去の思い出、遮断された幕のかなたに消えたのではなくて、俺の今日の現実だった。君のために、俺の日記、随想録、手紙、比島時代の古い資料の類が、ひとまとめにして、応接間の両袖机の右の三番目の抽匣(ひきだし)の底にある。こっそり母に話し、誰にも知られずに、君

が見て、焼きすててくれたまえ。俺は人間の責任において、自分自身を絞首刑にするのだ。それでも、君は俺を許さないかも知れないが」

老母と恋人との分は、縊死した庭の椋の木の枝にむすびつけてあり、私の分は、佐古組の少年給仕岩佐君が、家に届けてくれた。私がそれを開いてみてびっくりし、馳けつけたときには、佐古はもう目的を遂げていて、仏間に、顔に白い布をかぶせられて、寝かされていた。

三通の遺書に共通しているのは、自分は疲れた、という文句である。私には、彼がなんに疲れたのか、はじめはまったく見当がつかなかったが、私のために残しておいてくれた佐古の遺品を、老母から受けとって見るにいたって、あまりのことに、ほとんど戦慄を禁ずることができなかった。それは怪しいという言葉だけではあらわすことのできない人間の深淵、そして、彼が私の手紙に書いている人間の責任ということの重大な意義、順序も筋道も立たないくせに、避け得られない人間の運命、悲劇と喜劇との交錯、その矛盾の教訓、――私はそういうさまざまの感想に胸中を攪乱され、彼のために悲しむよりも、何かへの怒りで、拳をふるわせたのである。友人佐古雄太郎が亡霊とのたたかい、そして、殺人の疲労で、ついに死をえらばなくてはならなくなったことが、たんに彼一個の個人問題をはなれたある意味、戦争が人間にとっての最大の罪悪であり、敵であることへ、否応なしにぶつかるのだ。

その後も、いろいろ明らかになった事情があり、佐古が残してくれた日記類と綜合してみて彼の自

殺の謎を解いておきたい。兇悪なる殺人者佐古雄太郎への鞭としてではなく、霊前への花束として。

リカルド・マナロの最初の亡霊

桜が白く庭を光らせている。昔、ある炭鉱王が金にあかせて建てたというこの山の手の邸宅は、森林のような欝蒼とした庭を持っていた。そんなことにはあまりかまわない佐古が、買いとってからもすこしも手入れなどしなかったので、樹々は茂り放題、日もささぬ暗い場所もところどころにあり、小鳥が群れ、夜は梟も鳴いた。しかし、そのなかに点々とある桜が花をひらくと、庭の表情もにわかにあかるく花やいで見えた。

離れで、老母と二人、佐古雄太郎は心はしやぐ思いで、たのしい明日の計画に酔っていた。雄太郎は、五尺七寸、まず大男の方である。性質は柔和だが、直情果断なところがあり、浅ぐろい顔は希臘の彫刻でも見るようにひきしまっていて、そのよく廻転する大きな眼は、明察と、機敏さとをはっきり示している。

くわえた煙草から、紫の煙が森の方へ消えてゆく。

「桂さんの都合も聞いてみなければねえ」

にこにこと、丸顔いっぱいに微笑をたたえて、母もたのしいらしい。

「千絵さんの方は、ええんですよ。親代りの兄さんも承諾してるんです。この前の日曜に会いました。すべてまかせるといっています」

「そんなら、善は急げ、早い方が、…」

「僕もそう思っとるんです。ただね、緑町マーケットの建築が、日限を切られているのでしょう。あれは、五日の港祭までに、どうしても仕上げねばならんのですよ。三階建のデパートのようなもんだから、よっぽど急がんと間にあいません。結婚式に日をとられると、約束がちょっと危くなるのですよ。それで、どうせ、あと一ケ月、マーケットの完成祝いと、結婚式といっしょにやったら、などとも考えているんです」

「そうだねえ、その方がお祝いが重なって、おめでたも一層栄えるかも知れんねえ。そうするか」

「そうしてくれますか」

「おっ母さんは、いいんだよ。どうせ、お前まかせだから」

「じゃ、そうしましょう」

親子は、茶をのんで、小鳥のさえずりを聞いた。

「お父さんが生きていなすったら、どんなによろこびなさるかねえ」老母はうっすら涙の幕をつくって、「お父さんが生前やりかけて失敗したことを、全部、お前がやりとげたんだもの。建築も、運送も、鋼鉄業も、どれもこれも、お父さんはしくじりなさった。おまけに、何度、市会議員に出ても、

落ちてばかりいてね」ふっと、おかしそうに笑って、「でも、そのお父さんの失敗が、結局、雄ちゃんを作ったんだと思うよ。きっとお父さんの魂が、お前に乗りうつっているのかも知れないよ。でも、お母さんはほんとにうれしいよ。お前たち二人兄弟、戦争がはじまってお前はフィリピン、精次郎は満州に行ったときには二人ともとても生きてかえれまいと思って、情なかったもんだ。ひところはあきらめてもいた。それが、お前は生きてかえったばかりか、こんなに立派になるなんて。しかも雄ちゃんは小さいときから真面目で、曲ったことがきらいだったから、こんな世の中になっても、ちっとも悪いこともしないで、成功できたんだから。たれもかれもが大ぴらで闇をやっているのに。でも、四二は男の厄年だから、今年は、いくらか心配もあったんだけど、市会議員には当選するし、建築の方もうまくゆくし、おまけによいお嫁さんも来るというし、厄年なんて、お母さんの旧弊だとおかしくなるくらいだよ。この上、シベリヤにいる清次郎がかえって来さえすれば、いうことはないんだがねえ」

親子の幸福な会話は、いつまでも尽きなかった。

しかし、老母ヨネには、嫁に対する多少の危惧がなくもなかった。佐古組の社長としていまを時めく息子には、どんなよいところからでも嫁の来手があるのに、桂千絵がダンサーであることが、不安なのだった。交際のひろくなった雄太郎が、たまたま、同業者たちと踊りに行った小倉市のキャバレ・牡丹で見いだし、熱烈に愛するようになったのだから、いかんともしかたがなかった。雄太郎は、

マニラでダンスをおぼえてきて、まず垢ぬけのした踊りかたをした。そして、度重なって通ううち、千絵もどうやら、雄太郎に惹かれるようになって、結婚話が進められたのである。母も会って、千絵が、じだらくな女でなく、まったく生活上の手段でダンサーをしている真面目な女であるように見てとった。息子を信じて、千絵を信じることにきめた。

「お話し中ですが、……」

廊下づたいに、会計の吉岡角治がやって来た。癖の、長い顎髯をもみながら、

「神田車輌からお電話で、今夜、来ていただけるかどうか、御返事を願いたいと、いうちょりますが」

「場所は？」

「高塔亭だそうです。六時とかで」

「参ります、と伝えてくれ」

「はい」

吉岡は、庭の方を見て、桜が咲きましたな、うちの花見もせにゃならんですな、といいながら、ひょこひょこ、事務所の方へ去って行った。

「また、宴会かい？　よく飲みごとが続くねえ」

「どうも、役所の人にゃ、飲ませんことには、仕事が貰えんのでしてね。今度は、すこし大きな仕事なんですよ。まあ、心配なさらんで、僕にまかせておいて下さい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.